

スタディツアー参加者からの報告 (日刊新周南 連載記事から)

藤屋侃二さん(68) 下松市幸ヶ丘 元KRY取締役ラジオ局長

4

2009年(平成21年) 2月26日(木)

ロリ新聞 191



山のモンの人たち

二人の青年が勢よく餅をつくると日本に似るような錯覚に陥る。ラオス国境に近いタイ北部の山の村、ナムカーの人たちが餅をついて歓迎してくれた。あえて日本との違いを探せば、日本のうすは円形だが、モンのは舟型である。タイ国王がモン族のためにロッジを五棟建てたナムカー村に三日間滞在したが、この間、一回も餅をついて

くれた。最初は歓迎のために白餅、二日目は土産のために赤米。丸く平たくして、バナナの葉に包んでくれた。モンの人たちも日本と同じように正月や祝いごとに餅をつく。餅つきは日本人とモンの人たち以外にはない習慣という。日本人そっくりの顔つきの人が多く、赤ちゃんには蒙古斑(はん)が出る。餅つきを見ながらモンの人たちの祖先と日

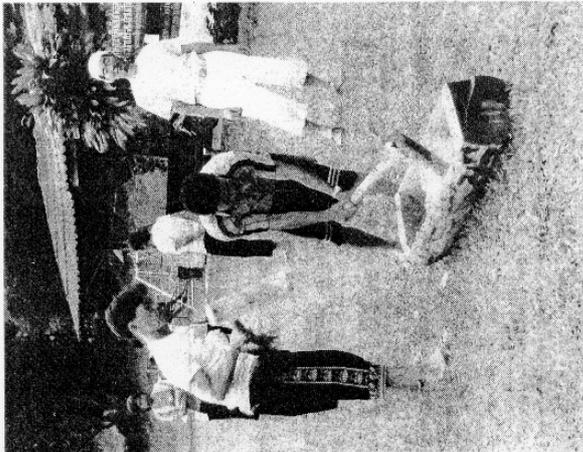
本人の祖先は同じだっただけに違いと改めて思った。四十人余りが入れるロッジ下の集会所は壁は一面だけで、その壁の前に奥行き一、幅二のガラスのショーケースが二つあった。中は三段になっていてランチヨン・マットなど刺しゅう製品が並んでいる。村の婦人たちが作ったもので、ロッジを利用した人の土産品の陳列ケースだ。日ごろの買い物は妻の担当だが、今回は病気で妻は参加できなかったので

早速、買い求めることにした。約一バツは約三円。値段札を見ながら日本円ではどれくらいか計算したが、安いとにやがて全部買いたくなくなる。ケースの一番端に藍染めの反物があった。モンの人たちが藍染め文化を持っていることに驚く。シャンティ山口の佐伯事務局長によると、今、タイ北部の山に住んでいるのはラオスから来た人がほとんどで、ラオスのモン族は藍染めが盛んだという。値段を見ると五百バツ、藍染め一反がわずかに千五百円だ。クロスステッチの刺しゅう製品は娘が関わるパレスチナの製品と



ポシェット、人形にも刺しゅう

よく似ている。地域や民族によって多少は違うが、人間の営みは同じだと実感する。モン族の婦人たちは大変働き者で、農作業はもちろんだが、時間があれば家族の民族衣装や土産用の刺しゅう製品を作る。赤ちゃんを背負った幼稚園の先生が売店の責任者のようで、たくさん買ったので、にっこり笑っててくれる坊主の人形をプレゼントしてくれた。(元山口放送取締役ラジオ局長)



モンの人たちの餅つき



妻の土産の上着と藍染めの反物